



CONTENTS

- 1-トピックス ISO 9001：2015の次期改訂動向
- 2-私の提言 サステナブル社会実現のための品質管理の役割と責任
- 2-ルポルターージュ 第440回事業所見学会ルポ
- 3-山田 秀 氏・本学会会長 日経品質管理文献賞を受賞
- 3-仁科 健 氏・本学会元中部支部長 日経品質管理文献賞を受賞
- 3-デミング賞受賞者一覧／2024年9月の入会者紹介
- 4-行事案内／JSQC各賞表彰／論文募集／関西事務局ビル名称変更のお知らせ

発行 一般社団法人 日本品質管理学会

東京都杉並区高円寺南1-2-1 日本科学技術連盟東高円寺ビル内

電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507

ホームページ:www.jsqc.org/

ISO 9001：2015の次期改訂動向

テクノファ 代表取締役／ISO/TC 176/SC 2/WG 29 (ISO 9001改訂) エキスパート 須田 晋介

ISO 9001:2015の改訂プロジェクトがISO/TC 176/SC 2/WG 29のもと、2023年11月から本格的に動きだした。

■ スケジュール

改訂版の発行は、2026年9月を予定している。当初は2025年11月であったが、CDにおいて、コメント処理に難航しスケジュールが延期された。以下に改訂スケジュールを示す。(本記事掲載時)

2023年11月：New project approved

12月：WD-500 (作業原案) 発行

2024年 4月：CD (委員会原案) 発行

(以下、予定)

2025年 1月：CD2発行

7月：DIS (照会原案) 発行

2026年 4月：FDIS (最終国際規格案)

発行

9月：IS (国際規格) 発行

■ 設計仕様書

ISO 9001では規格改訂時に設計仕様書を作成している。これは改訂方針や改訂に当たっての具体的な仕様を定めた文書である。今回の設計仕様書では、規格の目的、タイトル、構成やプロセスアプローチの採用など、規格の根幹となるところについては、変更しないこととした。その中で改訂に当たってのインプットとして複数の事項が挙げられており、特に重要となるのが、「品質における新たなトレンド」と「リスク及び機会」の2つである。

■ 品質における新たなトレンド

ISO/TC176/TF4 (Emerging trends in quality) において、14のテーマを取り上げた「品質マネジメントにおける新たなテーマ (Emerging themes relating to quality management)」のペーパーが発行されている。以下が14のテーマである。

- ①顧客体験、②人々の側面、③関係性の管理、④人口動態の変化、⑤変化のマネジメント、⑥統合、⑦機敏さ、⑧ナレッジマネジメント、⑨革新、⑩情報の側面、⑪循環型経済、⑫新しいテクノロジー、⑬倫理及び誠実さ、⑭組織文化

これまでのWG29の会議では、これら14のテーマについて次の規格改訂に反映するかどうか、する場合はその方法について議論をしてきた。そして、「変更のマネジメント」、「倫理及び誠実さ」と「組織文化」を要求事項へ反映することがCDにおいて合意された。

- ⑤変更のマネジメント：6.3 (変更の計画) のビュレットとして、有効性の監視、結果のレビューを追加
- ⑬倫理及び誠実さ、⑭組織文化：5.1 (リーダーシップ及びコミットメント) のビュレットとして、トップマネジメントが促進する事項として追加。ただし、組織文化は品質文化とした。

■ リスク及び機会

6.1 (リスク及び機会への取組み) については、ISO 9001：2015に対する

ユーザー調査でも要求事項の明確化の改善が必要であることが示されていた。また、TG4において、Risk concept paperが発行されており、この文書で示された考え方を考慮した改訂が検討された。もっとも特徴的なことは、リスク及び機会を「de-couple」することである。すなわち、分けて記述することである。Risk concept paperでは、リスクは悪影響を考えることが一般的であり、機会はポジティブなリスクではないなどの考えが示されている。このことから、CDではリスクと機会を6.1.1.1 (リスクの決定) 及び6.1.1.2 (機会の決定) と簡条を分けて記述した。(なお、CD2に向けた議論では、6.1についてHSへの準拠を考慮する必要があるとの意見があり、6.1をこのように大幅に変更するかどうかはまだ不透明である。)

■ まとめ

ISO 9001：2015の改訂はまだCD段階であり、今後内容が変わる可能性があることに注意する必要がある。今回の改訂は大幅な改訂とはならないが、倫理や文化に関わる要求事項を追加する方向で議論は進んでおり、QMSにおける社会的・規範的側面に関わる要求事項が強化される方向である。リスク及び機会については、要求事項の明確化が進み、ユーザーにとってより使いやすい規格になるとよいだろう。

● 私の提言 ●

サステナブル社会実現のための品質管理の役割と責任

千葉商科大学 サービス創造学部 横山 真弘



1970年に設立された日本品質管理学会は、既に50年以上の歴史を重ねています。当時のわが国は高度成長期

にあり、敗戦国として異例の経済成長を遂げ、GDPで世界第2位に達しました。しかし、その経済の進展とともに環境破壊といった負の遺産も抱えることになり、品質管理による国際競争力の維持というミクロ的視点と、環境保全というマクロ的視点がわが国に課せられることになりました。このようにして、日本品質管理学会の使命と責任は技術の進展とともに増し、現在の安

心・安全な技術基盤を支えていくことになりました。

折しも、2015年には国連においてSDGsが掲げられ、時代はサステナブル社会へと進んでいます。「一人も取り残さない」というテーマは、日本品質管理学会にとっても原点を問い直す大きなきっかけになると考えます。特にSDGsの目標9「産業と技術革新の基盤をつくろう」は、この実現のためには品質管理や品質保証の役割が重要であることを示しています。今後も技術はAI化などにより進展し、社会課題の解決への取り組みが不可欠です。

これまでの日本品質管理学会の歩みを振り返ると、品質管理は企業の開発の可能性やビジネスの広がり、それ

が引き起こす環境負荷といった社会課題という相反性をいかに乗り越えていくかといった道のりでもありました。つまり、製品の安心・安全を担保しつつ生産効率の向上が求められる中で、企業の利益最大化と消費者の安全確保という二律背反が顕在化するのです。しかし、それでもわが国の企業は、この両者を両立させる努力を継続し、「メイドインジャパン」として世界から高い信頼を得てきました。

それでも、こうした品質管理が実効性を持つためには、企業が利潤を上げ、投資が続けられる環境が必要です。わが国はこれまで「失われた30年」という長い経済停滞を経験してきましたが、品質管理をめぐる近年の不祥事もこれとは決して無関係とは言えないでしょう。だからこそ、サステナブル社会に貢献するためには、より着実なイノベーションが不可欠なのです。

第440回
事業所見学会
ルポ月桂冠株式会社
大手蔵

2024年5月30日(木)に29名参加のもと「月桂冠株式会社のマネジメントシステムについて」をテーマに京都伏見の大手蔵を訪問した。

大手蔵は日本酒メーカーでは初の酒造研究所「大倉酒造研究所」をルーツとする「月桂冠総合研究所」があり、四季醸造による安定した品質の日本酒を大量に供給している同社の主力工場である。

生産ライン見学においては、木桶ではなく発酵タンクが並ぶ近代的な工程で、自動化された微妙な品質管理や発酵制御による職人の経験や勘に頼らない酒造りを目の当たりにした。近代的とはいえ拘りの原材料や豊かな地下水「伏水」を使用し、脈々と受け継がれる酒造りの手法が踏襲されており、加えて要所に配された資格のある検査員による出来栄確認により安定した品質が担保されていた。

充填ラインでは、酒の紙パック充填から出荷用のカートン詰めを一貫して行っており、紙パックの組み立てから充填不良の流出防止メカニズムに至るまでをご教授いただいた。現在の紙パック容器はリサイクルし易いだけでなく保存性が瓶よりも向上しているなど、普段は気付かない光による品質劣化対策が進んでいることに感銘を受けた。

マネジメントシステムについては、品質・食品安全及び環境マネジメントの紹介、業務の見える化やDXについての改善事例を公表いただいたが、特に地球環境保全の取り組みとした排水処理改善による汚泥発生量ゼロ化や廃棄物リサイクルの推進については、環境に対する同社の強い理念が感じられた。

意見交換・質疑応答では事前のきき酒体験の効用もあり、忌憚のない多様な意見が活発に飛び交う非常に有意義な討論となった。

最後に月桂冠株式会社様におかれましては大変貴重な機会を提供いただき感謝の念に堪えません。

結城 隆之 (元・□-△(株))

山田 秀 氏・本学会会長 日経品質管理文献賞を受賞

本学会第54年度会長である山田秀氏（慶應義塾大学教授）の著書「実験計画法 - 過飽和計画の構成とデータ解析 -」と「実験計画法の活かし方 - 技術開発事例とその秘訣 -」が本年度の日経品質管理文献賞を受賞されました。「実験計画法 - 過飽和計画の構成とデータ解析 -」は、過

飽和計画を中心に執筆された、学術的水準の高い本格的な実験計画法の専門書であり、国際的にも類書がほとんどありません。「実験計画法の活かし方 - 技術開発事例とその秘訣 -」は、既存の教科書とは異なり、具体的な事例による問題設定を行った後に、その問題を解くための実験を計

画し、得られた実験データを分析して課題を達成するといった、品質管理現場における実験計画法の応用を意識した流れで執筆されています。

これらは、統計的実験計画法の発展に向けて尽力された山田氏の功績が認められての受賞であり、心よりお祝い申し上げます。

仁科 健 氏・本学会元中部支部長 日経品質管理文献賞を受賞

本学会の理事や中部支部長などを歴任されてきた仁科健氏（愛知工業大学）の著書、JSQC選書36「統計的工程管理 - 原点帰帰から新機軸へ -」が、本年度の日経品質管理文献賞を受賞されました。

本書では工程能力情報と管理用管理図に焦点を当てており、工程能力情報の二面性（技術特性と保証特性）を認

識するためのCapabilityとPerformanceの差別化と、Capability に裏打ちされたPerformance による工程能力評価、管理用管理図の役割と管理特性の見直しについて、原点帰帰から新機軸への展開を述べています。

戦後間もないころから現在までの文献を引用し、随所に具体的な特性や工程の事例を挿入しながら議論を

進めていることから、まさに副題である「原点帰帰から新機軸へ」にふさわしい内容となっています。

長年ご研究を続けてこられ、現在でも日本品質管理学会中部支部の東海地区若手研究会および産学連携研究会などでご活躍されている仁科健氏の受賞を心よりお祝い申し上げます。

デミング賞委員会（委員長 十倉 雅和）において、2024年度のデミング賞大賞、デミング賞特別功労・実践賞、デミング賞、日経品質管理文献賞の受賞者が決定し、授賞式は11月13日経団連会館にて執り行われました。

1. デミング賞大賞

小笠原 浩 氏 株式会社安川電機 代表取締役会長

2. デミング賞特別功労・実践賞

新藤 久和 氏 山梨大学 名誉教授
Prem Motwani 氏 ジャワハルラル・ネルー大学
元教授
光藤 義郎 氏 一般財団法人日本科学技術連盟嘱託

3. デミング賞

Tata AutoComp Systems Limited, Composites
Division (インド)
Tata Power Delhi Distribution Limited (インド)
Tata Ficosa Automotive Systems Private Limited (インド)
DMG森精機株式会社 伊賀事業所

4. 日経品質管理文献賞

「実験計画法 - 過飽和計画の構成とデータ解析 -」
山田 秀 著
「実験計画法の活かし方 - 技術開発事例とその秘訣 -」
山田 秀 編著
葛谷 和義、久保田 享、澤田 昌志、角谷 幹彦、
吉野 陸 著
「JSQC選書36 統計的工程管理
- 原点帰帰から新機軸へ -」
一般社団法人日本品質管理学会 監修
仁科 健 著

2024年9月の入会者紹介

2024年9月25日の理事会において、下記の通り正会員6名、準会員4名、職域会員2名、賛助会員3社3口の入会が承認されました。

（正会員6名）○Rasoul Aivazi (Rasoul Chiyoda Corporation) ○寺内 恒輝 (デンソー) ○熊田 英之祐 (奥野製菓

工業) ○竹下 潤一 (産業技術総合研究所) ○大森 克規 (住友理工) ○本谷 衛 (新日本理化)

（準会員4名）○瀨瀬 潤大 (東京理科大学) ○島田 涼平・但野 直翔・仲山 一成 (電気通信大学)

（職域会員2名）○望月 一隆 (富士フイルムビジネスイノベーション)

○五味 律子 (旭化成メディカル)

（賛助会員3社3口）

○トヨタテクニカルディベロップメント
○エンプラス ○溪仁会

名誉会員：24名 職域会員：53名

正会員：1589名 賛助職域会員：11名

準会員：71名 公共会員：11口

賛助会員：166社235口

行事案内

●JSQC規格「TQMの指針」講習会

日時：2024年11月28日(木)13:30~17:30

会場：オンライン (Zoomミーティング)

講師：安藤 之裕 氏 (技術士)

詳細・申込：https://jsqc.org/std11-001_2024/

●第144回クオリティトーク (東日本)

テーマ：DN7を活用したデータ駆動型品質管理とアジャイル改善の実践

ゲスト：吉野 睦 氏 (デンソー)

今村 凌大 氏 (デンソー)

日時：2024年12月10日(火)18:00~20:30

会場：オンライン (Zoomミーティング)

詳細・申込：<https://jsqc.org/144qtalk/>

●第24回「安全・安心のための管理技術と社会環境」ワークショップ

テーマ：未然防止活動による計画の質の向上とパフォーマンスの保証

日時：2024年12月23日(月)13:00~17:30

会場：オンライン (Cisco Webex Event)

プログラム：

1. 趣旨説明

木村 浩 氏 (木村学習コンサルタンツ)

2. 問題提起：計画の質を高めパフォーマンスを保証するには

中條 武志 氏 (中央大学)

3. スーパーマーケットにおける全員参加の未然防止活動 (仮)

丸山 将範 氏 (アクシアルリテイリング)

4. 医療における事故・インシデントを防ぐ活動の現状と課題 (仮)

金内 幸子 氏

(東京都医療保健協会 練馬総合病院)

5. 未然防止活動を組織に浸透・定着させるためのキーポイント (仮)

中村 聡 氏 (北九州産業学術推進機構)

6. パネルディスカッション

「未然防止活動による計画の質の向上とパフォーマンスの保証」

コーディネータ：中條 武志 氏

パネラー：三浦 茂紀 氏 (中部電力)、

飯塚 悦功 氏 (東京大学)、

木村 浩 氏 (木村学習コンサルタンツ)、

首藤 由紀 氏 (社会

安全研究所)、上記講演者

詳細・申込：https://jsqc.org/24ss_ws/

●JSQC規格「根本原因分析 (RCA) の指針」講習会 (予定)

日時：2025年1月29日(水)13:00~17:00

会場：オンライン (Zoomミーティング)

プログラム：

1. 用語の定義、人の不適切な行動、局所要因と組織要因 (序文~4.3章)

中條 武志 氏 (中央大学)

各賞表彰

第54回通常総会において、最優秀論文賞1件、品質技術賞1件、品質管理推進功労賞1氏、Activity Acknowledgment賞1氏の授賞および表彰が行われました。

【第53年度 最優秀論文賞】

『偏相関係数行列の逆行列を利用した主変数選択規準とグラフィカル・モデルに基づく特徴づけ』

吉田 悠夏 氏 (横浜国立大学 大学院 理工学府)

黒木 学 氏 (横浜国立大学 大学院 工学研究院)

「品質」Vol. 53, No. 4 pp. 51-63 (2023)

【第53年度 品質技術賞】

村川 賢司 氏 (村川技術士事務所)

『品質を核に人材育成を促進する仕組みの深化』

著者：村川 賢司 「品質」Vol. 54, No. 3 pp. 12-18 (2024)

【2024年度 品質管理推進功労賞】

杉谷 浩成 氏 住友電気工業(株)

【第53年度 Activity Acknowledgment賞】

吉田 悠夏 氏 (横浜国立大学 大学院 理工学府)

「品質」誌、投稿論文の募集!

会員の方々からの積極的な投稿をお勧めします。投稿区分は、報文、技術ノート、調査研究論文、応用研究論文、投稿論説、研究速報論文、クオリティレポート、レター、QCサロンです。

論文誌編集委員会

関西支部事務局

ビル名称変更のお知らせ

関西支部事務局のビル名称が変更となりましたので、お知らせいたします。

新番号：JRWD堂島タワー

旧番号：JRE堂島タワー

2. RCA、事故・品質トラブル等の事例の収集と選定(5.1章~5.2章)

永原 賢造 氏 (プロセスマネジメントテクノ)

3. 人の不適切な行動の分析とタイプの判定、局所要因の分析(5.3章~5.6章)

伊藤 誠 氏 (筑波大学)

4. 組織要因の分析、対策の検討と実施、効果の確認(5.7章~5.9章)

山本 和芳 氏 (積水化学工業)

5. RCAの組織的な推進・運営(6章)

鈴木 哲也 氏 (元・中部電力)

6. 全体討論 (質疑応答)

司会：中條 武志 氏

回答者：講演者・原案作成委員会委員

事務局

JSQCホームページ：<https://jsqc.org/>

本部：166-0003

東京都杉並区高円寺南1-2-1

日本科学技術連盟東高円寺ビル内

E-mail：jimukyoku@jsqc.org

TEL：03-5378-1506

FAX：03-5378-1507

中部支部：〒460-0008

名古屋市中区栄2-6-1

RT白川ビル7階

日本規格協会名古屋支部内

TEL：050-1742-6188

FAX：050-3535-8675

E-mail：nagoya51@jsa.or.jp

関西支部：〒530-0003

大阪市北区堂島2-4-27

JRWD堂島タワー11階

日本科学技術連盟大阪事務所内

TEL：06-6341-4627

FAX：06-6341-4615

E-mail：kansai@jsqc.org